



松高 こういう対談は初めてで、とても緊張しています。

キャンベル わかります(笑)。緊張しない人はいませんか。

松高 私は今、県立広島大学というところで学生相談の仕事をしています。肩書は室長ですが、実際の相談もたくさん受けています。その中にLGBTQの方もときどきやって来られます。ただ、カウンセラーでも心理の専門職でも、性に関して正しい知識を学んだり、どういふふうに対応したらいいかといった教育を受けてきてない人が多いんですね。私自身は特に多様なセクシュアリティについて関心があって、いろいろ調べたり研究したりしながら支援や現場に関わっています。LGBTQもそうですが、最近になって「SOGI (Sexual Orientation and Gender Identity)」という言葉がようやくポピュラーになってきたと感

じています。

キャンベル 確かに市民権を少しずつ得ていますよね。

松高 認知度が上がってきてはいるんですが、その一方で、当事者自身のしんどさというか、なかなか自分を外に表せないといった問題も今なお大きいと感じています。そういう状況について、キャンベルさんほどのように感じておられますか？

キャンベル 私自身、身体的に目立つということもありますが、メディアで活動しているの、私の名前と顔が一致する人からすれ違ふときに軽く会釈をされることがあるんですね。ただ、東京の人はあんまり驚かない人が多いですけど(笑)。僕の日常の中には、そういうことが普通にあって、それと僕がカミングアウトしているということが合わさって、面識がない人から声をかけられたり、相談というのと大げさですが、自分の

巻頭対談

Robert Campbell

ロバート キャンベル ×

Yuka Matsumoto

松高由佳

経験を私に話してこられる方がいます。そうした体験から、あくまで皮膚感覚としてですが、セクシュアリティのことを考えている人たちが増えている印象があります。

今『虹クロ』というNHKのテレビ番組に出演していて、視聴者の方からフィードバックをいただくことがあります。当事者の人たちだけではなく、その人たちと繋がっている人——つまり「ほとんどの人」ということになるわけですが、そういう人たちが実はセクシュアリティに限った話ではなく、私が発した言葉や番組内で話し合われたことが、家族や社会の中で自分が感じている生きづらさに、そのままパラレルに通じるという声を聞くことがとても多いです。

松高 ああ、そうなんです。

キャンベル SOGIやLGBTのことに限定して言うと、もちろん当事者たちにとっては非常に深刻なことです。なぜなら、自分の健康に直結することでもあるわけですから。ただ、そこにはいろいろなグラデーションがあって、それは色が薄くなつていくイメージではなく、別の意味、別の意義として、自分たちのごとや今この生きている社会の中がど



うなのか、自分はその中で何者になるうとしていいのか。特に若い人たちが、そうしたことを一つの起爆剤になるようなレベルで考えてくれているように感じます。

日本でもある程度は取り組んでいると思いますが、ヨーロッパやアメリカでは当事者の意識に関するアンケート調査を徹底的にやるんですね。それはLGBTがどこに何人いるか、に限らず、その人の職業であったり、どういう生き方をしているのかを問うわけです。例えば、法律や自治体の仕組みのような大きな枠組みを改善していくためには、そういうデータの積み上げが不可欠なんです。今申し上げていることが、少し特殊な属性を持った一人の市民として

の印象ですね。著しい変わり目というか、私たちは今、分岐点という堀の上にいるような感じがします。

自分の「身近な層」にある問題

松高 そういう感覚をキャンベルさんはおそらく何年も前から感じられていたんですね。特にここ最近は、そういうふうに関示というか、自分の言葉で自分のことを語る方が増えた感じでしょうか？

キャンベル 私もそうですけれども、自分のあり方を言語化したり、あるいは可視化されたりすると安心できるとすよね。特に日本社会においては、対立を回避することや、できるだけ否定するような場をつくらな

い力が、日本語という言語そのものや、教育制度をはじめさまざまな仕組みの中で働いているわけです。良く言えば、相手のことを慮^{おもひが}って、相手が不愉快にならないように、あるいは不愉快というよりも戸惑わないうように話をする。そういうことを常に意識しながら生きていると思うんですね。

そう考えると、相手がどういう立場にあるのかわからない中で、特にセクシュアリティという「違和感」を生み出しかねないトピックに関しては、若い人も、あらゆる世代の人でも、まだ公言することは難しい社会だと思えます。また、もう一つ感じることには、いわゆる当事者の方たちには、バイセクシュアルの人、ゲイ、レズビアンの人、トランスジェンダーの人というように、ものすごくいろんな幅があるんですね。それぞれさまざまなニーズというか、社会的な課題が異なる部分であると思うんです。このことは前からわかっていたけれども、具体的に差別をされることによつて、あるいは社会の中で与えられて当たり前のものについて、どれだけ妥協しながらそうした人々が生きているかということが、とてもよく見えてきたような気がし

ます。例えば、長年連れ添ったパートナーが入院をしたときに身元保証人にもなれず、場合によっては病室にも行けず、生死に関わる重大な医療判断の場に参画することができない。それは今この瞬間にも起きています。

そういうことが、一人や二人ではなくて、波紋のように広がって可視化されてきています。先ほど申し上げたように、まだデータとしては十分ではないかもしれませんが、そうした問題について、何が必要なのか、それはお金なのか、法律の改正なのか、もしくは人々の心の問題として捉えるべきなのか。最初の話に戻しますと、やっぱり一つ一つの事柄に言葉が連結して、繋ぎ合わさって、そのことによって人々の心というのが開く。今はそういう動きや作用が伝わっている真つ只中という感じがしますね。

松高 思いが表現されて、それが人に伝わって共有されていく。確かに当事者の方がどういうことに困っているとか、差別をされたとか、「これはおかしい」とか、本当にそういう声をどんどん上げるようになってきて、それで実際が変わってきたところもあると思いますし、そ

の声を周りの人が受け取って「じゃあ、こういうことに繋がっていい」とか、いろんな動きに繋がっていったりしています。私たちも、例えば、心理職にどういう教育訓練をするか、セクシュアリティに関するトピックをどう伝えていけばいいのか、そういうことを常に考えているわけなんです。

ただ、先ほどまさに「心の問題」と言われましたが、声を上げられるようになった一方で、そのことでSNSの世界で叩かれたり、考えが折り合わないと思う人が、ヘイト的な発言をしたりすることがあると思うんです。論争までは行かないにして

も、そこでまた傷つきがあったり…。
キャンベル 今、話をお聞きして思いつくのが『虹クロ』のことで

す。この番組にはリモートで参加される方もいますが、さまざまな地方から実際にスタジオまで足を運んで、本当に皆さんすごく勇気を振り絞って出てくださっているんですね。何かをそこで伝えたい、悩みを聞いてほしいという若い人たちが、毎回、私たちの目の前に現れるわけです。当然、一人一人が置かれている状況や環境は違うので、あまり公約数的には、これがすべての方に通じているとは言えないのですが、一つ感じることは、自分の周りにいる人に自分

の話をしてもいいけれど、気を遣われることが嫌だという人が多いんですね。

そういう言葉が重なっていくうちに、これは深いなというふうに思いました。何歳であろうと、自分のことをカミングアウトすることはとてもリスキーなことです。今の若い人たちの多くは、わりと周囲に知ってくれている友だちがいたり、家族がセーフティネットになっていたりするんです。でも、それでもなぜ言わないかという、言うことによって周りの人たちに気を遣わせることになる。昔から親を悲しませたくないから言わないということがありました。これが本当で、母の顔とか父の顔を想像すると怖気づいてしまいます。大好きなお祖母さんがすごく悲しむ、と思えば、お祖母さんを失望させたくないで、沈黙します。

この前会った子もそうでしたけれども、お祖母さんから振り袖の着物を買ってあげるよと言われ、いや、それは着たくないけどそう言い出せない。それを言うことによってお母さんやお祖母さんを悲しませたくないということがありました。

あと、今の若い人たちは承認欲求がとても高くて、「いいね」の数や



フォロワー数、SNSでどれぐらい自分が人と繋がっているのかが大事ということがありますよね。その中で、もし自分が今まで投稿してきたことと違うことを言ってしまったら、それまでの全部が崩れて周りの人たちが引いてしまうのではないか。引かないにしても違う目で自分を見るのではないか。これってやっぱり日本の言い方かもしれないけれども、気を「遣わせて」しまう。どうやって人に気を遣わせないかの方が大事なんです。

それに対して「そんなこと心配しなくてもいいよ」と言うのは簡単ですけれども、私はその気持ちが変わる気がするんですね。自分が差別を受けるのか、アパートが借りられないとか、ローンが組めないとか、好きな人と一緒に組めないということ、それは現実としては大変なんだけれども、この「気を遣わせてしまう」ことも日常的な悩みだということとです。

松高 具体的な、現実的な問題もあるにはあるけど、もう一つの層というか、人間関係や関係性が変わってしまうことの方が大きいわけですね。**キャンベル** 例えば、会社に入ると上司がどういいう人なのかということ



はずごく大きなことですね。部長や専務、社長クラスになると、インクルーシブな人が増えて、企業が大きくなればなるほどそういう取り組みをしたりするんですけれども、直属の管理者がどうなのかによって自分の日常がもう一八〇度変わるわけです。

一方で、先ほど申し上げたようなSNSもそうですし、ゲームもソーシャルゲームが基本になって、不特定多数の人との緩やかな関わりの中で自己表現をしたり、自分を確立していくということがあります。一つの場ではなく複数の場で、それぞれその都度名前を変えたりすることが普通にあるわけですね。そうすると、特に若い人たちの自我の同一性というものが、どう折り合っていくのか。どういふうにして整合性が保たれているのかが問題になるわけです。

僕もTikTokをやりますけれども、YouTubeをやったりTikTokをやっている人たちが今はもう普通にいっぱいいるわけですね。で、例えば三〇秒や一分の短い動画であっても、そこには間違いなく自分の、その時点で表したい自己というものが投影されているわけです。そうすると、今どういうセクシュアリティが自分の性質であるのか、そしてもしそれを抑制している自分がいたとして、その抑制を取り払ったときに何が起きるのか。それまでつくってきた自分との乖離というものが、できるかできないのかというところが非常に大事な気がします。ちなみに私の周りには、結局最後は親の顔とか上司の顔ではなく、フォロワーたちがどう思うかだという人がいたりします。

ただ、セクシュアリティについては、これは決して軽いものではない

し、ある年齢になって、ある人生のステージになって、自覚的になってから誰であつても悩むものだと思うんです。それを自分から公言をすることがどうかというときに、五年前や一〇年前とはやはりもうすでに違う状況があつて、その乗り越えるべきハードルが違っている。むしろハードルがどうと言うよりも、そのハードルを越える場所が違う感じがしているんですね。

松高 そのハードルを越える場所の一つに、フォロワーの反応があつたりするわけですか？

キャンベル 今はもうLGBTをキヤラ化することが求められるようになっていきます。それによって登録者数やビュー数が積み上がっていく。つまり承認されて成功に繋がっていくんですね。それはそれでいいと思うのですが、でも、いつの間にか、そのグループの中で自分がレズビア

ンの代表みたいになって、何かが起きたときにすべて自分が対応しないといけないとか、あるいはレズビアンならではの感性を求められるとか、こういうことがすごくあるんですね。**松高** 何かこう、役割を負わされるというか。

キャンベル 金水敏さんという著名な言語学者が日本語には「役割語」があるとおっしゃっているんですね。例えば「博士語」や「田舎のおかみさん語」みたいなものがあると。役割で言うと、「女性ならではの感覚や感性」を求められるのも女性が担わされている役割ですよね。同じように、今ではかなりなくなりましたが、今ではかなりなくなりましたけれども、昔は「外国人」もそうだったんですね。私のように前近代の日本文学を研究する外国人は、日本人では気づかないような、外国人ならではの目を通した新しい発見ができるはずだ、だからそれを我々に与えて

てくださいというふうに二〇代の頃からずっと言われて、それがすごいストレスでした（笑）。

「聴ききる」ことで得られる 深い理解

松高 そういうふうに外側から言われる、押しつけられると、いや、そうじゃないんだけど…と言いたくなりますよね。

キャンベル 押しつけられると、自分の個性や自我というものが、完全にうち消された感じがするんですね。役割を与えられてそれで安心できる人もいるし、すべて悪いというわけではないんですけど、女性であるとか、レズビアンであるとか、ゲイであるとかということが、一つの役割のようなものになると、本人たちは躊躇しますね。そういうことはあると思います。

松高 私たちも心理職として、ある

いは一般人としてもそうかもしれないですが、わかりやすいイメージだったり、先入観みたいなものからなかなか自由になれないことがあります。私はカウンセラーが抱えるバイアスについての研究を博士号のときにしていたんですが、自分が研究する立場にいても、つい思い込みというか、そうと気づかずに「ゲイの人」というのは大体こうだね「みたいなふう」に言ってしまうって、「いや、そうじゃないんですけど」と言われたりしたことがあって。なかなかそういうものから自由になれないということは本当にあるし、気をつけなければと思っています。

キャンベル 松高先生と同じように、僕もすごくたくさんの人にインタビューをしたり、話を聴いたりしますが、やっぱり「聴ききる」ということが非常に重要です。日本語のこの

「聴く」「聴ききる」「傾聴する」ということの中には、どこかで判断を留保する姿勢が、善し悪しはちよつと置いておいて相手の立場を共感まではしなくてもそのまま受け取るような態度がありますよね。僕はそこに日本社会の蓄積があると思っています、聴ききることが美德というか、評価される社会であると感じています。

そういうふうに最後まで聴ききつた後に質問をする。あるいは自分の立場を伝える。そこから初めて対話が始まると思うんですね。そして、セクシュアリティに関しては、まずは基本的な知識を持つてることが必要です。どういうことかと言うと、今の私たちが生きている社会の中で、その人たちはどういう状況に置かれているのか。権利と義務、あるいはどういう「制限」に縛られているのかということ、自分の中で整理できていないと、まず聴くことができないと思うんですね。

ただ、最初に私の皮膚感覚から申し上げたように、今この社会の中で生きている人たちの中で、本当に加率的に意識が変わっていつています。「あなたは私とどういふふうに関係がつているのか。これから一緒に



どういうふうにやっていくのか」ということがやっぱり大事だと思っ
ている人たちが増えているように思
います。

ウクライナでの出会い

キャンベル 去年の六月にウクライ
ナに行く機会があって、そのときに
LGBTのシェルターを訪ねたんで
すね。そこに身を寄せている一〇代
の人たちがたくさんいて、施設の担
当者から話を聞いたんですが、早い
話が今日生きるか死ぬかわからない
中で、自分が誰と寝ているかとか、
誰を対象に恋い焦がれているかとい
うことは、本当に小さいことだと彼
ら自身も感じていると言うんですね。
旧ソ連の地域もほぼそうであるよう
に、セクシュアリティに関してウク
ライナは非常に保守的です。そんな
中で戦争が起きて、志願兵の中には
ゲイもレズビアンもトランスヴェス
タイト (transvestite) の人たちがた
くさんいます。中にはレインボーの
腕章をつくって、それをつけている
人たちがかなりいるんです。そして、
戦争で銃器を持つ人たちだけではな
く、多くの人がボランティアになっ
て、自分の仕事以外のことに関わっ

ているんですね。

例えば、リビウのシェルターにい
る若いLGBTの人たちは、土日に
ボランティアで犬の散歩をしている
と聞きました。飼い主を失った犬が
大量にアニマル・シェルターにいて、
彼らは一五人ぐらいのグループでそ
こに行って、毎週二時間ぐらい犬に
散歩させたり、動物と触れ合ったり
しています。また、それぞれの拠点
には心理カウンセラーがいて、医者
もいて、HIVカウンセリングを行
うスペシャリストがいます。そんな
ふうに、いろんな従事者たちがいる

けれども、みんなが社会に出て見え
るような形で貢献をするわけです。
いろんなところでそうした状況が起
きていて、彼らとしては非常に生き
やすくなったというふうに言ってい
るんですね。

災害が起きたり戦争が起きたりす
ると、ある種のユートピア状態にな
ることは、これはよく言われること
です。平和な状態になったらどうな
るのか、また前の状態に戻ってしま
うということもありますが、そうや
って見えるような形で社会に関わっ
ていける、そういう場や契機がある



ということが重要だと思います。

松高 やっぱり状況が違えば、セク
シュアリティの扱いというか、世の
中の見方や当事者の中での感じ方が
違ってくるんですね。ウクライナとい
う極限状態の中で、そういうことが
起きることもあるし、日本の若者を
取り巻くSNSの状況も実は何がが
すごく変化する契機なのかもしれま
せん。個人の中で変化することも大
事です。が、コミュニケーションだ
それよりも大きな社会状況との兼ね
合いで影響を受けるものだというこ
とを改めて感じました。

キャンベル 二週間余りの滞在でし
たが、朝から晩まで、とにかくたく
さんの人と話しました。本当に信号
待ちをしている間とか、エレベータ
ーを待っている間に話しかけてきて、
私が日本から来たということがわか
ると、「来てくれてありがとう」と
手を取って言うんですね。そして自
分の精神状態を堰を切ったように打
ち明けてくれるわけです。以前は精
神安定剤を飲んでいることは隠すべ
きことだったのが、今はもうみんな
でどういう薬を飲んでいるか見せ合
いっこをしたりしていると。それが
自分たちの武器なんだと。自分は銃
器を持ってないから、せめて心を穏や

かにできるようにしている、だからこれは大切な薬だというふうに言うんです。

私が会ったLGBTの当事者たちは、社会の中で自分の新たな役割を見つけたり、それを拡張したんですね。自分たちが活動できる部分というものが、悲しいことに、不幸の中にあっただけです。

〈社会〉をサポートする視点

松高 少し話が離れてしまいかもしれないんですけども、カウンセリングではそうしたことを大事にしたいと思っっているんです。「自分はこうなんだ」と言えることが本場に重要で、それができないことの大変さというか、ただそこにはできない理由が、しない方が安全かもしれないとか、そういうこともあって…。本場に一概に何がいいとは言えないと思うのですが、一人一人、その人が置かれた状況の中で、何がその人の意思決定において大事なのかということころを丁寧に聴いていくしかないのかなというふうに思います。

キャンベル 松高先生たちがなさっていることは、とても尊い、重要なお仕事ですし、一対一、一人一人と



向き合っさせてされているわけですね。おっしゃる通り、そこにはそのときの状況やそれぞれの判断があると思います。ただ、我々がやっぱり心がけるべきことは、そこにいない人たち——それはその人の保護者であったり、同僚であったり、近所の人たちであったりするわけですが、そうした周囲の人たちが当事者と繋がりを保持しているということを見ることが、そこから始めないといけないと思うんです。

特にここ最近では『虹クロ』という番組に出て、そのフィードバックを

聞いていると、とても遠いところにいるはずの人たちの気づきを感じる機会が多いんですね。「遠いところ」というのは、自分の息子や娘は当事者ではない、自分に関係ないと思っ

ている人たちのことです。そうした人から「ああ、私に気を遣わせたくないから子どもは大事なことを言っていないんだ」という声が届く。

「そう考えると、俺も仕事を選ぶときにこういうことがあって失敗した」とか「私が子育てしているときに職場でこういうことがあった」と、一見全然違うトピックに見えるもの

が実は繋がっていて、「ああ、そういう立場や状況に、彼ら彼女たちがいるんだ」と気づく。僕はそれは大事な、とても大きなスイッチだと思うんですね。そのスイッチをやっぱり大切にしないといけない。

これは、カウンセリングの場では異なる話になるのかもしれないけれども、そのスイッチに対してもっと私たちが自覚的になってやっっていないと。そうすれば、みんなが息をつきやすくなるというか、空気がおいしくなるというか、そういうことがきつ々しと思うんです。

松高 本場に関係ないと思っ

ていた人たちがそういうことに気づいて、それがうねりとなって社会の制度を動かしていった、その中で当事者の人も、そうではない周りの人も変わって、認識がしやすくなって息がしやすくなることは確かにありますよね。

みんながハッピーになる、と言ったらちよつと言い過ぎかもしれないが、ハッピーになる人たちが増えるのは確かだと思うので、私たち心理職の間は個別の関わりを重視してはいませんが、一方でキャンベルさんがおっしゃるようなマクロの視点を大事にしなければと思います。



キャンベル もう一つ、私の知人や友人に当事者で子育てをしている人たちがいるんです。本当にその人たちは毎日大変さを噛み締めながら覚悟を持って育てているんですが、一方でその子どもたちは、この日本社会の中で、やっぱりどこか影のようなものの中に生きていますね。そこには抜けるような青空はないんです。例えば、自分にはお父さんが二人いる。お母さんが二人いる。どうして二人は結婚できないのか。こうしたことは子どもの福祉に本当に直結するんですよ。

僕の周りには、わりと立場も恵まれて、それなりにサポートがあって、お祖父さんやお祖母さんの理解やスタッフの助けがあったり、あるいは

しっかりそういうことがわかっている学校に子どもを通わせるような場所に住んでいる人たちがいます。そうした人からはそこまで悲壮な話は聞きませんけれども、特に地方にいる人たちは容易なことではないんですね。自分たちで安全なバブルをつくらないと、子どもを守ることができません。それははじめもそうだし、教育環境や部活のこともあります。彼女らから話を聞くと、これはやっぱりマクロで物事を考えないといけないと思います。

そうしたマクロな視点を、心理の先生たちがどのように一対一の臨床現場の中に織り込んで、生かせるかということが重要な点であるように思いますね。

松高 最近ずっと「家族」にどういうサポートができるのかという研究をしたいて考えていたので、本当に今の話と繋がる気がしています。私は広島で活動していて、子育て支援の関係者と話をする機会がありますが、やっぱり同性のカップルに会ったことがないという人がほとんどだ

ったりするんです。そういう人たちにも認識を持ってもらえようように、何かしていかなければいけないと思っています。

キャンベル あと、子育てに関することで言うと、ひとり親世帯を含めて貧困の問題がありますよね。例えば、貧困について国や自治体からサポートを受けることは恥ずかしいことでも何も悪いことでもないんですけども、セクシュアリティについては、特に子育てということになると、自分たち親自身のことはいいけれども、特に子どものことになると、さまざまなハードルがすごく高くなってしまうことは当然あると思っています。

松高 もうセクシュアリティのことだけではなくて、私たちの中にある多様性やさまざまなニーズをもっと明らかにしていかなければいけないですね。

キャンベル いわゆるセクシュアリティのことマイノリティになっていく人たちの中には「放っておいてよ」と言う人たちもいますし、決して一枚岩ではないわけです。そういうことはあるわけですけども、ただ、やっぱり先ほど言ったように、それでも「聴ききる」ことはできま

す。自分の状況を整理したり、自分の周りがどういうふうにも実際になっているかをしっかりと把握すること。安心して自分はこうだと言えるような、まず小さい空間をつくっていくということが大事ですね。

松高 そうですね。市井の中に自分がいて、どうやってコミュニケーションをつくっていくか。本当はもつとお話をお聴きしたいんですが、残念ながらお時間が来てしまったようです…。
キャンベル ありがとうございます。ちょうど日が暮れたところで終わりますね(笑)。

ロバート キャンベル
ニューヨーク市出身。日本文学研究者。専門は江戸・明治時代の文学、特に江戸中期から明治の漢文学、芸術、思想などに関する研究を行う。早稲田大学特命教授、早稲田大学国際文学館(村上天樹ライブラリー)顧問、国文学研究資料館前館長、東京大学名誉教授。主な編著に『戦争語彙集』(岩波書店)、『よむつわ』(淡交社)、『日本古典と感染症』(角川ソフィア文庫、編)、『井上陽水英訳詞集』(講談社)、『東京百年物語』(岩波文庫)等がある。

松高由佳(まつたか ゆか)
2007年広島大学大学院教育学研究科人間科学専攻博士課程後期修了。博士(心理学)。臨床心理士・公認心理師。現在、県立広島大学広島キャンパス学生相談室長、准教授。広島県、広島市HIV派遣カウンセラーとしても活動中。